

世界が必要とするものを —発明を商品に変えたエジソン—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

偉大な発明家といえばトーマス・エジソン(1847-1931)を想い浮かべるだろう。白熱電球、蓄音機、映写機など84年の生涯で取得した特許は全世界で2000件以上に及んでいる。

とはいえ実態はエジソンが独自に開発したものより既成の発明品を改良したものが圧倒的に多い。科学的な発見を実用化・商品化・事業化する点で彼の右に出る者はいなかった。

企業家としてのエジソンは情報収集を欠かさず、市場のニーズを敏感に嗅ぎ分け、いくつも会社を立ち上げた。世界最大のテクノロジー複合企業であるゼネラル・エレクトリック(GE)の礎を築いたのはエジソンだ。新製品・新技術を守るために訴訟も厭わずライバルから訴訟王と揶揄された。

偉人、天才、発明王という教科書的な理解だとエジソンの実像は見えてこない。

母に育まれた才能で

エジソンはアメリカ・オハイオ州のミランで7人兄弟の末っ子として生まれた。製材業を営む父のサミュエルは嫉にきびしくエジソンは聡明な母ナンシーを慕っていた。家業は不調で彼が7歳のときミシガン州のポートヒューロンに移り住む。

小学校に通い始めると授業でWhy?を連発し、教師から疎まれて劣等生扱いされた。わずか3カ月で退学し、父からも見放されたエジソンは唯一の理解者である母から勉強を教わった。

教育熱心な母はエジソンの非凡な科学的才能

に気づいてニュートンの『自然科学の数学的原理』などを読み聞かせた。家の地下室はエジソン専用

の実験室として電気部品や化学薬品を買い与えた。のちにエジソン

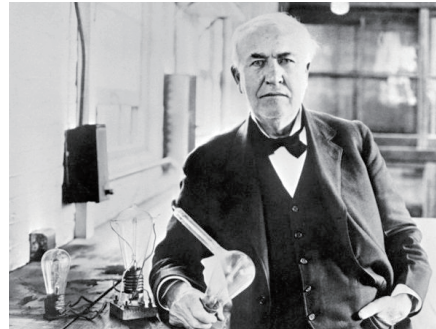
は「母がいなければ私は発明家になっていなかった」と語っている。

12歳で鉄道の駅の新聞売りとして働きだし、夜は図書館で本を読み漁った。新聞好きで15歳のときにみずから新聞を発行し、車内で販売するという早熟な少年だった。

当時は電話も無線も発明されておらずモールス信号による電信が長距離間の唯一の通信手段となっていた。エジソンは電信技術を熱心に学び、駅で重宝されていた電信技士となって高額の収入を新発明の研究に注ぎ込んだ。

初の特許は1868年、21歳で取得した。議会における賛成・反対の得票数を瞬時に記録し、集計にかかる時間と手間を削減する電気投票記録機を開発する。自信満々のエジソンは爆発的な反響を期待したものの、まったく採用されなかった。

誤算の原因は市場のニーズを事前に把握して



トーマス・エジソン

いなかった点にある。売れないものを発明しても意味がない。そう考えたエジソンは綿密なリサーチによる売れる商品づくりへと発想を転換する。

事業を拡張する指揮官

苦い経験を活かして翌年さっそく第2の特許を取得した株式相場表示機ティックャーは業界関係者から歓迎された。特許権を譲り受けたいという話が持ち上がり、エジソンは5千ドルで売るつもりでいた。ところが当初の予想を遥かに上回る金額を提示され、最終的に現在で約2億円に相当する4万ドルで買い取られた。

ついに獲得した大金を元手に1871年、ニュージャージー州ニューアークに研究所と工場を設立する。有能なスタッフを集めて株券印刷機、電報用の4重送信システム、モールス信号の高速解読機などを次々と発明した。

1876年、施設を拡張するためにニューヨーク郊外のメンロパークに移転する。もはやエジソンは一介の発明家ではなく優秀な発明家集団を率いるエネルギーな指揮官となっていた。

これまでにない大仕事として全米の電信事業を牛耳るウエスタン・ユニオンの依頼で電話機の発明に着手する。電話の父として歴史に名を残すグラハム・ベルらと特許をめぐる烈しく対立した。蓄音機の開発ではレコード会社ビクターの先駆者となるエミール・ベルリナーと覇権を争った。

1878年にエジソン電気照明会社を設立し、実用的に改良した白熱電球を売り捌く。1882年、ニューヨークの商工業地域であるパルストリートに発電機6台を並列した全米初の火力発電所を開設し、持続的な電力供給システムを確立した。

1889年、電気事業を総合的に手がけるエジソン・ゼネラル・エレクトリックを発足。1892年、同社の大株主である金融王J・P・モルガンの仲介で競合メーカーのトムソン・ヒューストンと合併し、現在のGEが誕生した。

電力事業を押し進める一方でエジソンは映画産業にも手を伸ばした。1893年、新たに移転したウェストオレンジ研究所の敷地内に全米初の映画スタジオであるブラック・マリアをオープンする。1900年代にマンハッタンとブロンクスにも映画

スタジオを設け、動画の撮影装置キネトグラフと再生装置キネトスコープを駆使して約1200本の白黒フィルムを制作し、東部の映画界に君臨した。

並外れた成功の要因を尋ねられてエジソンは次のように答えている。「まず世界が必要としているものを見つけ出す。そして先へ進み、それを発明するのだ」と。

魂というエネルギー

有名な「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」という格言にも明らかのようにエジソンは比類のない努力家だった。とはいえ彼は無理やり努力していたわけではない。発明を通じて知的好奇心を充たすことを無上の喜びとしていた。

時計のない仕事場にベッドを置き、何度か仮眠をとりながら昼夜を問わず研究に没頭した。80歳を過ぎて「私にはまだやらなければならない仕事がある。少なくともあと15年は働かなければならない」と1日16時間のペースで仕事をした。

無類のメモ魔で食事の会話から夢のなかで見たことまで何でも書きとめた。生涯で3500冊ものノートを残している。

不運を不運とも思わない究極のプラス思考の持ち主でもあった。難聴を患っていても「音に惑わされることなく考えることができるし、いつでも静かな環境で眠ることができる」とメリットに眼を向けようとする。仕事があまく進まないときでも「私は失敗したことがない。ただ一万通りのうまくいかない方法を見つけただけだ」「私たちの最大の弱点は諦めることにある。成功するのにもっとも確実な方法は常にもう一回だけ試してみることだ」「困るということは次の新しい世界を発見する扉である」と決して挫けないファイターとしての炎を燃やしつづけた。

晩年はオカルトに魅せられ、来世を信じ、死者と交信する電信装置を研究していた。人間の魂もエネルギーの一種であり、他のエネルギーと同様に魂というエネルギーは不変で死後も存在すると考えていた。

たとえ肉体は滅びても魂となって永遠に生きつづけたいと願っていたのかもしれない。さすがのエジソンも命まで発明することはできなかった。